

障害定義の戦略的・実践的使用を問う**ー障害者にとっての「有用性」に鑑みた障害定義の選択・使用ー**

○ 北星学園大学 氏名 牧田 俊樹 (009220)

キーワード：全体論、有用性、障害定義の戦略的・実践的使用

1. 研究目的

「障害とは何か」、言い換えると、「障害ということばが意味するものは何か」という問いがある。しかしその問いに一義的に答えることはできない。クワインの「全体論」がそれを示している。クワインの「全体論」は、その帰結として「『ことばや文にはそれぞれ一定の〈意味〉がある』ということを否定する」(丹治 2009:130)。「一つの信念体系を受け入れている、ということが、そこに登場することばの『理解』を構成する」のである(丹治 2009:131)。ここでいう信念体系は様々なことばの組み合わせからなる。つまり、あることばの意味はさまざまなことばとの関係、ここでいう信念体系に依存して決められるのである。そうすると、「障害」ということばの意味は、わたしたちがすでに埋もれている信念体系によって異なることとなる。これらのことを背景として、障害定義に対する新たなアプローチが可能となる。「障害」の意味が一義的に定まらず、多様な障害定義が成立するならば、個々の障害者問題に合わせ、最も適した障害定義を選択し、戦略的・実践的に使用することができるのではないかと。例えば障害者の急性疼痛と慢性疼痛によって障害定義を使い分けたり、知的障害を現象学的に定義したり、障害者運動の形態や目標ごとに障害定義を変えたりすることが同時にできるはずである。本報告の目的は、事例ごとの異なる目的に適った、障害定義の戦略的・実践的使用を議論の俎上に載せることである。障害定義に関する議論は、障害学・社会福祉学においてしばしばなされてきた。しかし、障害定義を一つに固定せず、戦略的・実践的に複数使用していくという議論は寡聞にして知らない。よって本報告は障害定義の議論に新しい視点をもたらすという点で意義を有すると考える。

2. 研究の視点および方法

障害定義の戦略的・実践的使用の「有用性」について、予想される批判への応答を皮切りに論を展開し、最終的にその「有用性」を議論の俎上に載せる。

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程等にのっとり研究を実施している。

4. 研究結果

クワインの「全体論」から障害定義が一つに定まらないことが示された。しかしそれにしたがうならば、どの障害定義も「正しい」(真)となってしまうのではないかと。このような批判が予想される。しかし、障害定義が一つに定まらないからといってどの障害定義も「正しい」(真)とするつもりはない。ローティは言う。「真理」とは、「わたしたちにとって信じる方がよりよいもの」である(Rorty 1979:10)。ローティにとって「真理」とは「有

用性」に鑑みて決められるものなのである。本報告はこの立場をとる。そうすると、例えば個人モデルの定義は、障害者にとっての「有用性」に反するので、そこから導き出される障害定義(理解)は真(真理)ではないこととなる。障害定義の戦略的・実践的使用とはこのように障害者にとっての「有用性」に鑑みてなされるものである。富田の「興味深いことに、それぞれの語彙は、それぞれに異なる目的を達成するのに適している」という指摘は示唆に富む(富田 2016 : 188)。同様に、多様な障害定義も達成すべき目的によって適不適がある。ただ一つの定義の使用は、何かを厳密に規定したい場合には有効かもしれないが、事例ごとに異なる多様な目的を達成するためには、それほど「有用」ではない。それどころか障害定義を一つに固定することは、障害に関する問題の多様性を無視し、問題の複雑な諸相を一元化する危険性を有している。

そうは言うものの、障害定義の使い分けなど可能なのだろうか。日常生活でわたしたちはすでに、相手の信念体系を窺いながら、障害定義を使い分け、他者と「対話」している。例えば、診断の場において、医療従事者の実在論の文脈に沿い、その言語使用に合わせることで、己の信念体系による「障害」を調整し医療的ケアを受ける。一方で、社会学に関する学術的な場で発言する場合、「障害」を構築とする理論にのっとって議論を交わすこともあるであろう。状況により障害定義は適切に使い分けられているのである。では、障害定義の選択は、どのようになされるべきであろうか。それは「対話」によってなされるべきである。しかし、「対話」とは頻繁に推奨されるほど容易なものではない。なぜならわたしたちはすでに、己の信念体系に埋没しているからである。すでに埋没している信念体系からはじめざるを得ない「対話」は、数多の不一致が予想され、決して容易いものとは言えない。この「対話」を根気よく続けながら、多様な目的に応じて戦略的・実践的に複数の障害定義を選択・使用していくことが必要である。

5. 考察

一つの障害定義に固執すると、多様な個別事例に柔軟に対応できず、本来、そこに含まれることを望む人たちを「定義の外部」へと追いやる可能性を否定できない。加えて刻一刻と理論は古くなり、それに反して障害現象はますます複雑化することを考えると、一つの定義では予測不能の不具合がより頻繁に生じるのではないか。これらを踏まえると多様な信念体系からその都度複数の障害定義を取り入れていくことの方が好ましいように思われる。重要なのは、唯一の「正しい」障害定義を見付けることではなく、障害者にとっての「有用性」に鑑みて、障害定義を積極的に使用することである。

文献

丹治信春 (2009) 『クワイン——ホーリズムの哲学』 平凡社。

Rorty, R. (1979) Philosophy and the Mirror of Nature, Princeton University Press.

富田恭彦 (2016) 『ローティ——連帯と自己超克の思想』 筑摩書房。